

分布: 全国

コナスビ (サクラソウ科)

リシマキア ヤボニカ
学名: *Lysimachia japonica*

小茄子 別名: 烏帽子草(エボシグサ), 草茄子(クサナスビ)

主な生育場所

畑、田畑の畦、庭先、路傍、草地、林内などに生育する。人里・里山から山地まで日当たりのよい草地からやや陰地まで広くみられる。やや湿り気のある場所を好み、湿地にも見られることがある。

特徴

小型の多年草で冬でも葉は残る。茎は軟毛を密生し、株元から分枝四方に這う。広卵形で鋸歯のない葉は対生し、長さ1-2.5cm、幅1~2cm。春から秋にかけて直径5-7mmほどの5裂した黄色い小さな花を葉腋に伸ばした短い花茎の先に1個ずつつける。花後にできる果実は径4~5mmの球形でまばらに長毛が生える。



名前の由来: 先のとがった5裂する萼(ガク)に包まれた小さな丸い果実の形が、若い時期の茄子(ナスビ)や丸ナスの形に似ていることからコナスビ。

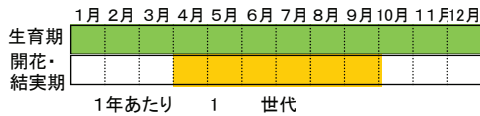
<農業との関係>

畑や樹園地にも見られるありふれた雑草だが、地を這う小型種であること、目立った雑草害もないことから、話題にされることは少ない。畦畔に生えた場合、高い位置での刈り取りが継続と群落化しグランドカバーとして利用できることもあるが、繁殖力は強くないので同様に刈り取りに強いオオジシバリなどほふく茎を旺盛に伸ばす植物との競合には弱く、実際に群落化することは少ない。



地面を這うように伸びる

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> グランドカバーの目的で導入され、北海道や本州の一部に帰化しているヨーロッパ原産のヨウシュコナスビ(コバンコナスビ)は、花の直径が約2cmと大きく、葉は楕円形となり、全体に毛がほとんど生えていない。

<一言うちく>

コナスビはありふれた地味な花弁なのですが、コナスビが属するサクラソウ科オカトラノオ属の仲間には、クサレダマやヤナギトラノオ、ヌマトラノオなど、茶花として利用されるほどの可憐な花をつける山野草も多く、海外の仲間にもリシマキアとして鑑賞利用されるものも多いです。



丸ナスに似ている? 果実

<人との関わり合い>

作用成分は明らかになっていないが、民間薬として夏に全草を採取して乾燥させたものを粉末にして腫れ物に塗ると効果があるとされる。また、全草を陰干しにして煎じて飲むと胃の痛みによく効くという。また、小型種であり全体に毛があるためか、食用としての利用の記録は見当たらない。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 不明】

園芸種となっているものも多いサクラソウ科の仲間であり、平開する5裂した花はそれなりに趣もあるが、如何せん小型種で、同じような黄色い花でもカタバミやヘビイチゴの陰に隠れがちなので、短歌や俳句などに取り上げられることがないようである。もっと認知度が高まれば、ありふれた草だけに俳句などに登場すると思われるのだが……

分布: 全国

オオオナモミ (キク科)

クサンチウム オリエンタレ
学名: *Xanthium orientale*

オリエンタレ
subsp. *orientale*

雄菜揉み 別名: ひつつきむし、とつつき、ホシダマ、バカの実

主な生育場所

日当たりの良い荒地や路傍、河川敷、ため池の縁、畑、樹園地、飼料畑などで見られる。果実は動物や人間の衣服などにくっついて散布されるため、農村部だけでなく都市周辺でもよく見かける。

特徴

高さ0.5~2mにも達する北米原産の一年生帰化植物。全体に短毛を敷き着しざらつく。茎は直立し太く、よく枝分かれする。葉は浅く3~5裂し、縁に不揃いの鋸歯がある。夏から秋にかけて葉腋に短い花序を出し、多数の果実をつける。果実は長さ2~2.5cmと大きく、4~6mmの刺が密に生え、先端に大きな2個のくちばしが突き出す。



名前の由来: 毒蛇に噛まれたときなどに、痛みを和らげるために生の葉を揉んで(なもみ)傷口につけた植物のうち、雄々しかったのがオオナモミ。外来種の大オオナモミはさらに大型だったため。

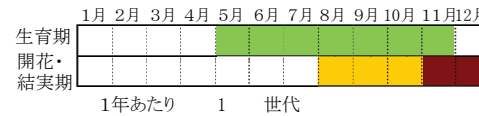
<農業との関係>

近年、飼料畑で増加し、草高が高くなることからほ場全体を覆い尽くしてしまうことがある。また、有毒成分が含まれ、家畜が誤って食べると食欲減退や中毒を招くため、牧草地では刈り取り駆除が必要となる。ただ、飼料作物との競合には比較的弱く、早期に作物の生育が確保されるとオオオナモミの生育はかなり抑制される。また、開花期以前に地際近くを刈り取れば、種子生産を抑制できる。



2本の大きな嘴が突き出した果実。刺の先は鉤状。

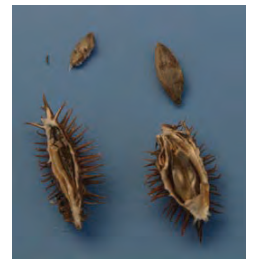
<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 在来種のオオナモミの果実に敷く刺の密度はオオオナモミよりも低く、先端の2個のくちばしも小さい。また、帰化植物のイガオオナモミは、果実の刺がオオオナモミより密で刺の表面に縮れた毛が生え、茎に黒紫色の線や斑点が出やすい。

<一言うちく>

1948年にスイスのジョルジュ・デ・メストラル氏は、自分の服や犬の毛にぎっしりくっついてきたオオナモミの果実をヒントに、果実に密生する先端が鉤状の刺の構造を応用して、面ファスナー(マジックテープ)を発明しました。身近な生物の仕組みも大発明のヒントとなるよい例ですね。



果実を割ると大小2つの種子がある

<人との関わり合い>

昔からオオナモミの仲間の果実は、代表的なひつつきむしとして、果実を投げ合うなど子どもたちの野良の遊びの材料だった。また、家畜が食べると中毒症状を起こすが、若菜や種子は人の食用となる。天日乾燥したものは「蒼耳(そうじ)」で、成熟した果実は「蒼耳子(そうじし)」と呼ばれる生薬で、解熱、頭痛、痛み止め、解毒などに効用があるが、毒性もあるので多用は避ける。果実から絞った油にはリノール酸が多く含まれ、動脈硬化の予防にも役に立つ。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】 ※蒼耳: オオナモミのこと。

風過ぎてより蒼耳のうすみどり (福谷 俊子) 足音をあつめオオナモミばかりなり (永末 恵子)
をなもみを くつつけ合せて おくれゆく (近藤 忠) 君の背の をなもみ ひとつ そのままに (斎藤 朝比古)
尊さと遠さは同じことだけ川べりに群生のオオナモミ (吉岡 太朗)

分布：全国

ハハコグサ (キク科)

学名: *Gnaphalium affine*

母子草 別名：ハウコグサ、ゴギョウ、キバナグサ、トノサマヨモギ、カラスノオキユウ

主な生育場所

田の畦、入水前の水田、畑、樹園地、荒地、休耕地、野原、庭先など、人里や農地周辺の至るところに普通にみられる。日当たりの良いやや湿った場所を好むが、冠水するような場所には生えない。

特徴

全体に白い綿毛で覆われた越年生ときに多年生。茎は根元から分枝し、直立する。冬期はロゼット葉で過ごし、茎につく葉は柔らかくへら型で互生し縁はやや波打つ。4~6月ごろ、枝先に舌状花が黄緑色の筒状花のみ集まった頭花をつける。ロゼット葉は花期には枯れる。花後に長さ約2mmの冠毛のある0.5mmほどの種子をつける。

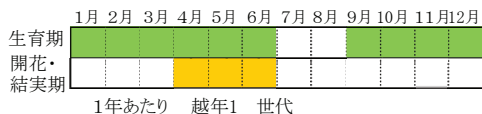


名前の由来：名の由来には多説あり、葉や茎が白い綿毛をかぶっている様子から、母親が子を包みこむように見えたことから、母子草(ハハコグサ)の名がついたという説が一般的である。

<農業との関係>

ハハコグサは、縄文時代後期にムギ類の栽培とともに朝鮮半島経由で中国大陸から日本列島に渡来してきた史前帰化植物のひとつとされている。従って、今でも水田裏作の小麦や大麦栽培時に多く生えることがあり、雑草害を引き起こす場合がある。また、芝栽培でも問題となることもある。しかし、春耕や入水後の水田では姿を消し、害草となることはない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> チチコグサの頭状花は黄緑色で、包葉がよく目立ち、葉の幅はハハコグサより狭く、表面にはあまり毛を生やさない。外来種のウラジロチチコグサやチチコグサモドキは、葉腋にも集合花をつけ、いずれも花の色は淡褐色~紅色となる。

<一言うんちく>

牧野富太郎博士によれば、茎の白毛が”はおけ立って”いるので、「ハハケル」と呼ばれ、母子の字が充てられたとされました。また、古名ゴギョウ(御形)とは、平安時代の史徳天皇の祖母と父が相次いで亡くなったとき、不思議と野辺にハハコグサの姿がなかったとの故事によります。

<人との関わり合い>

春の七草のひとつとして、旧暦の1月7日ごろに摘んだ若菜を茹でて七草がゆにしたり、ヨモギと同様に草団子や草餅の材料にする。また、綿毛がたくさん生えている若菜は天ぷらにしても美味しい。生薬では鼠麴草(そきくそう)と呼ばれ、開花期に全草を採取し、水洗いして天日でよく乾燥させたものは、咳止め、痰止めに良いとされる。また、全草を黒焼きにしてゴマ油と混ぜたものは、皮膚病や虫に効くとされる。古来には、乾燥させた花を煙草にして煙を吸わせ、胆石治療にも使われていた。

<俳句や短歌への登場>

【季語：春】 老いて尚つかしき名の母子草 (高浜虚子) すりこぎや父はおそろし母子草 (斎部路通)
花の里心も知らず春の野にいろいろ摘めるははこもちひぞ (和泉式部)
ははこ摘むやよひの月になりぬればひらけぬらしな我が宿の桃 (曾爾好忠)
はるの田を耕し人のゆきかひに泥にまみれし鼠麴草の花 (長塚 節)

分布：沖縄を除く全国

フデリンドウ (リンドウ科)

学名: *Gentiana zollingeri*

筆竜胆 別名：筆龍膽(ひつりょうたん)

主な生育場所

日当たりの良い草原や林縁、落葉樹林などの明るい林床に見られる。やや乾いた環境を好み、低地から山地まで分布する。人里周辺では、夏に適度に草刈りされ、冬に地面まで日が差す草地に多い。

特徴

草丈5~10cmほどの二年草。秋に発芽し翌年の3月から5月にかけて開花結実する。卵形もしくは広卵形で厚みのある葉に葉柄はなく対生する。葉腋または茎頂に1~15個程度の花をつける。花冠は径2~2.5cm程度の淡い青紫色で、日が差すとラッパ状に開き先は5裂する。花色はときに白花や淡い桃色(トキ色)も見られる。

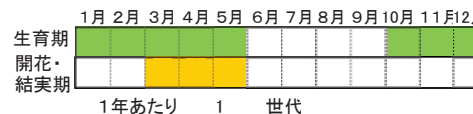


名前の由来：リンドウの仲間で、地面から伸びた茎の先に着く(つぼみ)の姿がフデの穂先に似ていることから「筆竜胆」。

<農業との関係>

耕起が頻繁に行われる畑や水田内に生えることはないが、適度に草刈りがなされ、日当たりのよいやや乾き気味の畦畔草地やため池の法面草地などには生育する。早春の他の草も伸びる前に花を咲かせ枯れてしまうので、農作業の邪魔にはならず、花も目立つことから春の農作業の開始を告げる農事暦に利用されることもあったと思われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 同じ時期に咲くハルリンドウの花は径2~3cmとやや大きく、花色も濃い。またハルリンドウの茎につく葉の幅は披針形でやや狭く、根出葉が目立つ。コケリンドウは全体小ぶり、草丈3cmほどで花径も1cmに満たず花色も淡い青色。

<一言うんちく>

最近の研究からはフデリンドウの発芽や初期生育は明るい草地環境だけでなく、共生する菌根菌にも依存していることもわかってきました。フデリンドウの姿を見かけることが少なくなっているのは、草刈りなどの減少が日照条件に加え、土壌中の菌群にも影響しているためかも知れません。

<人との関わり合い>

フデリンドウは越年生であるが、カタクリやニリンソウなどと同様に春先の短い期間に可憐な花を着ける小型の植物として親しまれてきたと思われる。しかし、食用としては、秋から冬にかけて葉や茎を展開せず、開花期も短く植物体も小さいため利用されることはなかった。また、秋に咲くリンドウは根を天日で乾燥させて健胃薬として用い、フデリンドウにも食欲不振や消化不良などに効果が期待される成分が含まれるものの植物体が小さく生育期間も短いため利用されることはない。

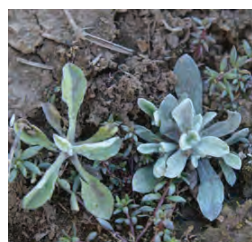
<俳句や短歌への登場>

【季語：春】
ハルリンドウもフデリンドウも滅びたる道に続けりフユノハナワラビ (石川不二子)
※秋に咲くリンドウについては俳句や短歌などに多く登場するが、意外と春に咲くフデリンドウやハルリンドウに関して詠われることは少ないようです。

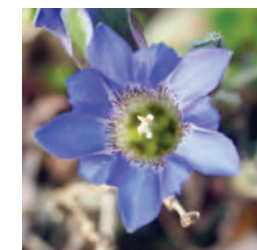
十数個の花を茎先に咲かせている様子



つぼみの状態がちょうど筆の穂先にみえる



左:チチコグサモドキ、右:ハハコグサのロゼット葉



裂片の間から副片が覗くため、花先は10裂にみえる。

分布: 全国

ハボタン (アブラナ科)

別名:

学名: *Brassica oleracea* var. *acephala* f. *brassica*
ブラシカ オレラケア アケバラ トリコロア

主な生育場所

様々に着色した葉を鑑賞対象とする園芸植物。耐寒性が強いので、冬季の花壇に植えられることが多い。地植え、プランターどちらでも育つ。また、お正月の飾り花として、門松に添えられることもある。

特徴

普通7月から8月に播種し、年を越し翌春に開花する。低温に会わないと葉の色づきは悪くなる。多年草なので開花後も育てることができるが、株元から分枝する草姿となる。また、自家不和合性(同じ個体の花粉で受精しない)のため、同じ系統の種取りを続けることは難しく、同じアブラナ属の近縁種と交雑しやすい。

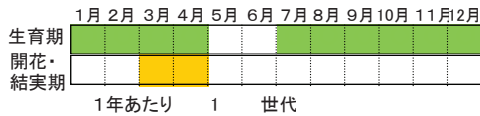


名前の由来: 様々に色づいた幅広の縁が波打つ葉が同心円状についていた様子が牡丹の花のように見えることから、葉牡丹。

<農業との関係>

原産地のヨーロッパでは古くから野菜として栽培されてきた。日本でも栽培されてきたが、導入当初から野菜としてではなく、観賞用として扱われてきたようだ。元々栽培種であったため、また主に葉を鑑賞対象とするため、花茎が伸びる前に処分してしまうことが多く、種子を付けることが少ないこともあって、花壇などの栽培場所以外に逃げ出している例はほとんどない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



冬の花壇に植えられたハボタン

<類似種> 分類学上はケールやキャベツ、ブロッコリー、カリフラワーを生み出したブラシカ・オレラケアの一変種なので、ケールやキャベツなどの葉とよく似ている。

<一言うちく>

原産のヨーロッパではケールと同じように味の良い野菜として知られていました。その後、日本では食味ではなく、景色や葉形に着目して品種改良を行ってきましたので、キャベツほどは柔らかく美味しくありませんが、アメリカでは食用としても利用されているようです。

<人との関わり合い>

ハボタンは江戸時代に渡来した結球しないケールが観賞用に品種改良された我が国作出の観賞植物である。当初は平滑な葉の紅白に色づくものが好まれたという。現在は、葉が平滑で丸葉の「東京丸葉系」、縮れ葉のケールと掛け合わされた「名古屋ちりめん系」、東京丸葉と名古屋ちりめんを掛け合わせた「大阪丸葉系」、ロシアの切れ葉ケールと丸葉系の掛け合わせ「さんご系」の4系統が主となっている。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 晩冬】 日毎来て磯ひよどりのついでみし葉ぼたんは茎長く抽きたり (岡野 弘彦)
冷えびえと雲(みぞれ)が洗ふ戸の外に明さ占めて葉牡丹はあり (木俣 修)
葉牡丹の色かさなりて開きそむ(長谷川 かな女) 葉牡丹やわが想ふ顔みな笑まふ(石田 波郷)
葉牡丹にうすき日さして来ては消え(久保田 万太郎) 葉牡丹のいとけなき葉は抱き合ふ(日野 草城)

分布: 全国

タチツボスミレ (スミレ科)

学名: *Viola grypoceras* ver. *grypoceras*
グイオラ グリボケラス グリボケラス
立ち坪堇 別名: ヤブスミレ, ミツバタチツボスミレ

主な生育場所

野原、山地、道ばた、庭先、林床など、里山から人里にかけて普通にみられる。日陰でも見られるが、日当たりのよい場所を好む。やや湿った草原にも生えるが、冠水するような場所には見られない。

特徴

種子もつれるが、主に短い地下茎で繁殖する多年生。根出葉には長い柄があり、心形の葉をつける。皮針形の托葉の縁は櫛の歯状。花期に節々から葉や花をつけた茎を伸ばす。花は薄紫色の5弁からなる左右相称花。花冠のつけ根が後方に伸びた距(きよ)は短円柱形で約6-8mm。花弁がなく萼片のみの閉鎖花も多かつける。

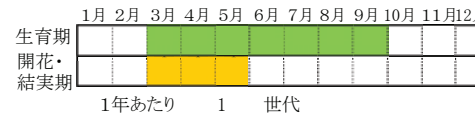


名前の由来: 宅地内や建物の隙間などに設けられる小さな庭は「坪庭」と呼ばれ、そのような庭先によく見られるスミレで、かつ茎があり立ちあがるように見えるので、立ち坪堇。スミレの語源は不明。

<農業との関係>

タチツボスミレは里山に最も普通なスミレであるが、他のスミレよりも、耕地周辺で見かけることは意外と少なく、果樹園や畑地の縁、棚田や谷津田の法面草地などに見られる程度である。また、花も綺麗であることから、スミレの仲間は作物と競合する雑草として扱われることは少なく、農作業の手を休める際に傍らで癒してくれる身近な野草として、古来から俳句や短歌などによく取り上げられている。

<生活史> 関東地方の例(目安)

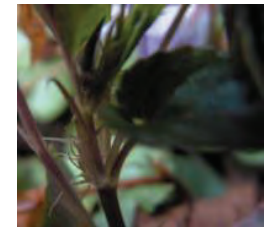


里山の林床に群生するタチツボスミレ

<類似種> タチツボスミレとともに里山によく見られるツボスミレの花は小さく白色で茎は地表を這う。スミレの茎は立ち上らず花は濃い紫色。西日本には葉が細長い三角状となるナガバタツボスミレや花に香りがあるニオイタチツボスミレが分布する。

<一言うちく>

野辺で最も多く見られるスミレで、下記の山部赤人が万葉集で詠い、摘めるほど群生する野辺の「すみれ」とは、タチツボスミレのこととされています。赤人ならずとも、春の野はスミレなどをさまざまな花が咲き乱れ、思わず帰ることを忘れて春暁を迎えてしまうこともあるかも知れません。



葉の基部の托葉の縁は櫛の歯状

<人との関わり合い>

スミレはいずれの種類も食用となり、万葉の時代から食されていたという。タチツボスミレの若葉や花も食べることができる。天ぷらにしたり、軽く茹でて、水に晒し、お浸しやゴマとえなどにする。空色の花を活かして、フルーツデザートやカナッペのトッピング、野菜サラダやスープなどに散らしてもよい。また、スミレにはルチンが含まれ、高血圧に良いとされるほか、清熱解毒作用のある薬草として、慢性喉痛、腫れ物、打撲痛などにも用いられるようだ。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 春】 春の野に すみれ摘みにと 来しわれぞ 野をなつかしみ 一夜寝にける (※万葉集 山部赤人)
山路来て何やらゆかしすみれ草(松尾芭蕉) 堇咲き崖にやさしき日ありけり(石塚友二)
かたまって薄き光の堇かな(渡辺水巴) 風軽したちつぼすみれ共に摘む(酒井 絹子)
三月の笑顔のような山道のタチツボスミレ 其処此処に咲く (鳥海昭子)

分布: 北海道を除く全国

アメリカフウロ (フウロソウ科)

ゲラニウム カロリニアヌム
学名: *Geranium carolinianum*

亜米利加風露 別名: ロシソウ(鷲嘴草)

主な生育場所

路傍や土手、田畑の畦畔、湛水前の水田、ムギ畑、冬野菜畑、果樹園、休耕地、空き地、庭先など、人里の至るところに見られる。日当たりがよく、やや乾いた肥沃な場所を好む。都市部にも侵入している。

特徴

北米原産の一年草または越年草。茎は基部からよく分岐して高さ40cmほどになる。全体に白い軟毛があり、円形で深く5裂しさらに細裂する葉には長い柄がある。葉腋から伸びた花柄の先に径0.5cmほどの淡紅色の5弁花を数個つける。果実の長さは約2cmで稜があり、5個の種子を入れる。果実が熟す頃から葉は赤紅葉をはじめる。



茎先に小さな淡紅色の5弁花をつける

名前の由来: アメリカから渡来したフウロソウの仲間であることから名付けられた。別名の鷲嘴草とは、細長い果実をサギの嘴に喩えた。

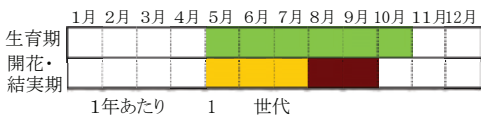
<農業との関係>

暖地では、麦や冬野菜の畑で雑草化し、富栄養環境で繁茂するため、ときに強害雑草となる。しかし、沖縄県では、アメリカフウロがジャガイモ青枯病に対する抗菌成分(Ethyl 3,4,5-trihydroxybenzoate)を有することを利用し、アメリカフウロを土壌中に鋤込むことによって、薬剤処理に頼らずにジャガイモ青枯病の防除を行っている。雑草を生やすことによって作物の病害防除に貢献する好例。



富栄養な畑などではよく繁茂する

<生活史> 関西地方の例(目安)



<類似種> 在来のゲンノショウコの葉は深く切れ込みが、花期は夏から秋にかけて花の大きさも径1~1.5cmと大きい。ヨーロッパ原産の外来種オトメフウロは、葉の切れ込みも深くアメリカフウロによく似るが、花は径7mmとやや大きく花色は紅紫色と濃い。

<一言うんちく>

ゼラニウムと呼ばれる園芸植物も、かつてはアメリカフウロやゲンノショウコと同じ仲間とされましたが、18世紀にレンジクアオイ属(ペラルゴニウム)として分類されました。しかし、古くからゼラニウム、ゼラニウムとして親しまれてきたので、今でもその呼び名が残っているのです。



基部まで深く切れ込む葉

<人との関わり合い>

ゲラニウム(フウロソウ属)の仲間には、5弁の綺麗な花をつけるものも多く、観賞用として古くから栽培されてきた。また、ゲンノショウコに代表されるように薬効を有する種類も多いが、アメリカフウロには確たる薬効成分はないとされる。また、昭和初期以降に侵入した比較的新しい帰化植物なので、食用の記録もみつからない。しかし、ジャガイモやトマトの青枯病の防除に有効な環境に優しい生物防除資材として、最近、注目を浴びてきている雑草である。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 初夏】

初夏やアメリカフウロつつましく (草花俳句 http://orangestudio.homeip.net/gallery/org/userid33129_page97 より)

分布: 全国

ツリガネニンジン (キキョウ科)

アデノフォラ トリフィルラ ヤポニカ
学名: *Adenophora triphylla* var. *japonica*

釣鐘人參 別名: 釣鐘草, 沙参(しゃじん), トトキ, トトキニンジン, ボタンヅル

主な生育場所

日当たりの良い畦や林縁、ため池の堤草地、河川堤防、山地や丘陵の草原などに生育する。刈り取りに強く、半自然草地(人の干渉が加わることで半自然的に維持されている草原)でよく見られる。

特徴

高さ30~100cmほどの直立する多年草。縁に鋸歯がある葉は3~5枚輪生し、たまに互生あるいは対生する。根生葉は円心形で花時には枯れてしまう。根は白くて太く朝鮮人參に似る。8~11月に茎先に花茎を伸ばし、長さ15~20mmの鐘型で垂れ下がった淡青色の花を輪生し数珠につける。花茎下部は分枝し円錐形の花序となる。



名前の由来: 鐘型で花冠から花柱が飛び出した花を寺の釣鐘に喩え、また根が朝鮮人參に似ていることから釣鐘人參。また、若葉がおいしく「とっておき」だったことから「ととき」。

<農業との関係>

刈り取りには強いが、耕耘によって太い根が切断されてしまうと枯れてしまうため、畑などの耕地に入ることはほとんどない。耕地周辺の適度な刈り取り圧がかかっている畦や草地に多いが、基盤整備などで土が動かされ新たに造成されたような畦や草地には見られない。農作業の邪魔にはならず、秋に可憐な花をつけるので、古来から農耕地周辺で親しまれてきたのではないだろうか。



花柱は花冠から突き出し、花冠先端は反り返る。

<生活史> 関西地方の例(目安)



<類似種> ツリガネニンジンの基本種であるサイヨウシャジン(中国地方以西)の分布で、花冠が壺型となり先端部がすぼまり、花柱は花冠からツリガネニンジンより長く突き出る。山地の林縁に多いソバナの花は輪生せず漏斗状で葉も互生。

<一言うんちく>

雑談に「山でうまいはオケラにトトキ、里でうまいはウリ、ナスビ 嫁にやるのも惜しうござる」とある「トトキ」とはツリガネニンジンの若芽のことで、茎を折るといやなおの乳液が出ますが、味はクセがなく独特のクコがありとても美味しい山菜として全国的に知られています。



刈られると円心形の根生葉を出す

<人との関わり合い>

トトキと呼ばれる若葉は茎先を摘んでタラの芽のように天ぷらにすると美味しい。また熱湯で茹で、冷水に晒して酢味噌や卵とおじ、油炒めなどにする。太い根はきんぴらや塩漬、味噌漬、花と蕾はサラダに入れても良く、どの部位も利用できる。また、ツリガネニンジンの仲間の生薬「沙参」として知られ、根を乾燥させたものにはサボニンやイヌリンなどが含まれ、咳止め、痰切り、のどの痛み止めに効用がある。風鈴に似た輪生する花も風情があり、生け花の材料や観賞対象ともなる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】

吊鐘人參など咲き山に還る畑 (須並 一衛) 山雨来て釣鐘人參鐘を打つ (前澤 宏光)
釣鐘人參揺れぬ観音詣かな (岡田 和子) ひよ渡る釣鐘人參揺れどほし (豊島美代)
日暮美し釣鐘人參など咲いて (松井 淑子) ゆく秋の鎌倉山の岩かげに釣鐘人參花下げておる (山崎 方代)

分布：全国

セイタカアワダチソウ (キク科)

ソリダゴ アルティシマ
学名: *Solidago altissima*

背高泡立草 別名：アワダチソウ、オウゴンソウ、セイタカアキノキリンソウ、代萩

主な生育場所

荒地、休耕地、田畑の畦、樹園地、道ばた、河川敷、土手、草地などのやや乾き気味の日当たりの良い場所を好んで群落を形成する。定着後の一時的な湛水に耐えるため時に湿地でも見られる。

特徴

種子もつけるが地下茎で増える北米原産の多年生。直立する茎は2.5mにも達し、茎と葉には固い短毛が密生する。3本の葉脈が目立つ葉は互生し葉縁には低い鋸歯がでる。10-11月に茎の上部に多数の直径5mmほどの黄色い頭状花を総状につけた多数の横枝を伸ばし円錐花序となる。冠毛付きの1mmの種子は風散布される。



名前の由来：在来種のアキノキリンソウ(別名：アワダチソウ)の草高が50~80cm程度に対し、1~2m以上と高くなることから。また黄色の頭花を泡のようにたくさん付けることから泡立ち草。

<農業との関係>

草高が2m以上と高く、地下茎で増え群生することから耕作放棄地や休耕地などで目立つが、耕起や湛水には弱いためほ場内で問題となることは少ない。樹園地や不耕起ほ場で発生が多くなることがあるが、刈りとりやすいため、こまめの刈り払いで対処できる。刈り払い回数の少ない畦畔やほ場へのアプローチ道路など非農耕地で繁茂すると視認性や農作業の効率に支障が出ることがある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 北海道などでセイタカアワダチソウよりも多く見られるオオアワダチソウの花期は初夏から夏にかけてと早く、茎や葉は無毛でざらつかない。在来種のアキノキリンソウの草高は約50cmと低いが、頭状花の直径は約12mmと大きく、花序は穂状。

<一言うちく>

戦後、各地に急速に拡がり、かつては花粉症の原因とされましたが、セイタカアワダチソウは虫媒花のため、花粉が風で拡散することは少なく、すっかり濡れ衣を着せさせられていました。しかし、他の植物の生育を抑える物質を根から出すため、在来の植生には大きな影響を与えています。

<人との関わり合い>

中年以上の世代には見慣れない植物が急激に増えたイメージから「嫌われ者」の印象も強いが、若い世代には秋の風物詩として群生する花が景観として馴染んできているようだ。原産地のアメリカでは州花と扱われることも。また養蜂にとっては蜜源植物としても優秀。食用にもなり、新芽や花は天ぷらにすると独特の風味があり美味しい。またセイタカアワダチソウを含むSolidago属にはポリフェノール類が多く、利尿や炎症抑制作用がある。民間薬として皮膚炎などにも効用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：秋】※背高泡立草を縮めて「泡立草」と詠むことが多い。
よく笑う女背高泡立草(増田栄子) どこまでも雨の背高泡立草(小西昭夫) 墓山の泡立草の強気かな(福谷俊子)
忘れぬし空地黄となす泡立草(山口波津女) 沼を吹く風を黄色に泡立草(和知喜八)
湖西線背高泡立草に延び(京極紀陽) 沿線の三角空地を輝やかに泡立草の黄はうづめたり(田谷 鋭)

分布：沖縄を除く全国

ネジバナ (ラン科)

スピランテス シネンシス アモエナ
学名: *Spiranthes sinensis* var. *amoena*

振花 別名：モジズリ、モジバナ、ネジレバナ、ネジリバナ

主な生育場所

芝地、路傍、庭先、畦畔、法面、樹園地などの日当たりの良い草地に生育する。乾燥気味よりもやや湿り気のある草地で良くみられるが、冠水する場所には生えない。定期的に刈られる草地にも多い。

特徴

種子でも繁殖するが、肥大した多肉根でも越冬する多年生。茎は細くて直立し草高は10-40cm。ほとんどの葉は根生し、幅3-4mm長さ5-20cm。花茎には1-3個の鱗片葉がつく。花序は長さ5-15cmで白い毛があり、5mmほどの淡紅色の花を螺旋状につける。花は兜状で、唇弁は色が淡く、縁や内側に短毛状の突起が密生している。



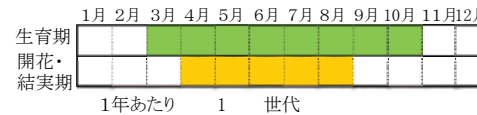
右巻のネジバナ

名前の由来：花茎の下から上に向かって花が螺旋状に並んで咲く様子を「振り(ねじり)花」とし、それが転化して、ネジバナとなった。

<農業との関係>

畦畔や樹園地などにも生え、雑草の性格が強いが、草高が低く、また綺麗な花を咲かせるため、駆除の対象となることはほとんどない。むしろ、草刈り機で刈り払う際にわざわざ本種を残して刈ることも多い。

<生活史> 関東地方の例(目安)



花を見ると小さくてもランであることがわかる

<類似種> 奄美大島以南の琉球諸島には、ネジバナよりも大型で花色が濃く、派手な感じのするナンゴクネジバナが分布する。また、ネジバナの花には香りが無いが、ナンゴクネジバナの花は良い香りがする。

<一言うちく>

ネジバナの螺旋状に並んで咲く花は、右巻と左巻とがあり、ほぼ1:1となるようです。しかし、地域や生育環境によっては、右巻・左巻のどちらかが多く見られ、また花茎の途中で巻き方が変わる個体もあるとのこと。皆さんのお近くのネジバナの花は、右巻ですか。左巻ですか。



やや湿った草地に生育

<人との関わり合い>

ラン(蘭)の仲間の野生種はめったに見ることができないものが多い中、ネジバナは人里で普通に分布する最も身近なランといえる。しかし、他のランと同様、栽培は難しく、野外でも同じ場所では安定的にみられない。花は小さくても、可憐なランの花なので、観賞用の山野草として販売されることもあるが、その多くは数年で消滅してしまう。また、本種に薬効や食用の記録は見当たらない。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】
振花のまことねぢれてみたるかな(草間時彦) 振花はねぢれて咲いて素直なり(青柳志解樹)
みちのくのしのぶもじずり 誰ゆえに 乱れむと思ふ 我ならなくに(河原左大臣:百人一首)
なすことなべてよぢれてゆく如き思ひに仰ぐもじずりの花(大西民子)

分布：沖縄を除く全国

ヒルガオ (ヒルガオ科)

カリステギア プベッセンス
学名: *Calystegia pubescens*

昼顔 別名：オリコバナ、ツンブーバナ、オコリズル、かみなり花、天気花、雨降り花

主な生育場所

道ばた、荒地、草地、林縁、畦畔、畑、樹園地、河川敷などに見られる。日当たりの良い場所を好み、日当たりを求めツルで水平・垂直方向に伸びていく。湿った場所に少ないが、乾燥には強い。

特徴

地下茎で増える多年生。葉は互生、茎にはわずかに細い毛が生えることがある。1~4cmの葉柄の先に5~10cmのほこ形まの葉をつけ、葉先は尖らず葉の基部は後方に張り出し裂けない。夏に葉腋から長い花柄を出し、白~淡紅色で直径約5cmの漏斗状の花を単生する。萼は2枚の卵形の大きな包葉に包まれる。通常、結実はない。



ヒルガオ：葉の基部は後方に張り出している。



コヒルガオ：葉の基部は横に張り出し二裂する。



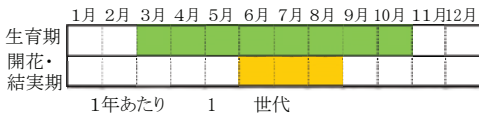
トモロコシに絡みついたヒルガオ

名前の由来：早朝から開花する「朝顔」、夕方から開花する「夕顔」、夜開花する「夜顔」に対し、主に日中に花が見られることからヒルガオ(昼顔)。「カオ」とは大きくて見た目が美しい花のこと。

<農業との関係>

ヒルガオの仲間、いずれも繁殖力がすさまじく、耕起などで切断された地下茎の断片から容易に発根するため、トラクターや農具に附着し各地の畑に侵入・定着する機会が多い。また、ツルで作物に絡みつき、また一株からの地下茎から5万個以上の萌芽を生産することも報告され、大豆やトモロコシ畑などで繁茂すると収穫が皆無となることも。定着すると根絶が困難な強害雑草の一つである。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> よく似たコヒルガオの花は直径3~4cmとやや小さく、花柄に翼があり、葉先は尖り、葉の基部が横に張り出し、二裂する。外来種のセイヨウヒルガオの花は直径3cmと小さく、花の基部につく包葉も小型、また葉柄は短く葉もヒルガオより小さい。

<一言うんちく>

ヒルガオの花はフランスで花言葉は「昼の美人」とされ、日本でも万葉の時代から「容花(かおばな)」として容姿端麗な女性を思い浮かべるほど美しい花とされてきました。一方、繁殖力旺盛な面から「危険な幸福」との花言葉も。またツルが絡みつく様子から「絆」の花言葉もあります。

<人との関わり合い>

夏の野辺に目立つ花は古来から詩歌の材料となってきた。一方、畑地では蔓延すると駆除が困難で雑草としての一面も強い草である。また、若菜の先を摘んでさっと塩茹でしたものや酢味噌等で食べられ、細長く白い地下茎もよく泥を落として煮物、揚げ物にできる。花も、酢を落とした熱湯にくぐらせ、甘酢などで食べる。開花期の全草を天日乾燥したものは生薬で旋花(せんか)と呼ばれ、裁断し煎じて飲むと、利尿、疲労回復、強壮に良いとされる。生の葉の絞り汁は、虫刺され、切り傷にも使える。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】 昼がほやともにも刈らるゝ麦畠 (天野桃隣) 昼顔に草鞋を直す別れ哉 (正岡子規)
高円の野辺の容花(かおばな)面影に見えつつ妹は忘れかねつも (万葉集・大伴家持) ※容花=ヒルガオ
遠方(をちかた)のものの声よりおぼつかかなみどりの中ひるがまの花 (与謝野晶子)
線路沿ひの夏くさはらの昼顔の夢のはかささ十歳ごろより知る (前川 佐美雄)

分布：本州、四国、九州

カワラケツメイ (マメ科)

カマエクリスタ ノマメ
学名: *Chamaecrista nomame*

河原決明 別名：ノマメ(野豆)、マメ茶、ネム茶、ハマ茶、弘法茶、キシ豆、コウカイ茶

主な生育場所

日当たりが良く、やや乾燥した野原や路傍、土手、海岸草地、河川敷、田畑の畦畔、ため池堤畔草地などに見られる。ときに畑や果樹園内などにも生える。焼け跡に群生することもある。

特徴

高さ30~60cmになる一年草。茎は堅く直立し、上部にやや密に短毛をしく。羽状複葉の葉は互生し、小葉は15-35対。托葉は線状皮針形で葉柄にイボ状の腺点がある。夏から秋にかけて葉腋から花柄を伸ばし、黄色の径約0.7mmの5弁花を1~2個つける。花後、扁平で多毛な莢果をつけ、光沢のある種子を8-11個入れる。

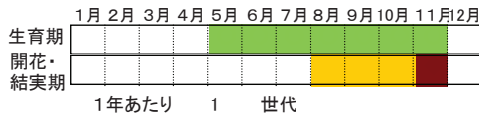


名前の由来：エビスグサ(決明:ケツメイ)(※種子は漢方薬の決明子:ケツメイシ)に似て、河原などによく生えることから。別名は莢果を健康茶として利用できることから、茶がつくものが多い。

<農業との関係>

畑内に群生することもあるが、発生頻度は多くないので害草とはなりにくい。エビスグサやハブソウの仲間、健康茶として利用できるため、畦畔などの群落は茶葉としての適期の若い実ができる頃まで刈り残すことも多い。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 16年7月号で紹介したクサネムとそっくりだが、クサネムは湿地に生え、花はマメ科特有の蝶型花、莢果は横~下向きにつく。エビスグサやハブソウの草丈は1m前後と高く、小葉は幅が広い倒卵形で、花も大きい。

<一言うんちく>

カワラケツメイの全草を煎じたお茶は古くから健康茶として知られ、一説には弘法大師が愛飲し、全国各地にその効用とともに広められたとされています。青森県野辺地町や山口県山口市旧徳地町では、庭先等で栽培されてきたカワラケツメイを特産品として地域興しに利用しています。



マメ科では珍しい梅花状の5弁花



莢果は茎に上向きにつく

<人との関わり合い>

8月から9月ごろの花と若い果実をつけた全草を陰干しして刻んだものは、生薬名「三偏豆(さんべんず)」と呼ばれ、決明子と同様に、煎じて飲むと強壮、利尿、便秘などに効くとされる。茎葉を摘んで茶葉としても利用でき、ポリフェノールを多く含むため、整腸作用や脂肪吸収の抑制効果が高く、また、高血圧や動脈硬化予防に効果のある成分も含む。なお、絶滅危惧種のツマグロキチヨウの唯一の食草で、ツマグロキチヨウとともに保全対象としている地域もある。

<俳句や短歌への登場>

【季語：不明】
別名も含めて、俳句や短歌への登場は見つからなかった。余談として、ジャパニーズポップグループの「ケツメイシ」は、薬剤師の資格を持っているメンバーも含まれていることもあり、グループ名は薬草「決明子」から由来している。これは決明子が便秘薬として使われていることから、「すべてを出し尽くす」という思いを込めたとされている。

分布: 全国

イヌタヌキモ (タヌキモ科)

ウトリキュリア アウストラリス
学名: *Utricularia australis*

犬狸藻 別名:

主な生育場所

ため池や湖沼、水路、水田などに生育する。水田脇のちよつとした湿地帯にも見られることがある。水田の場合、湿田や多雪地帯などの冬期にも乾燥しにくく、強度の中干しを行わない条件下で多い。

特徴

根を下ろさずに水中を浮遊する多年生の水生植物。長さ1mに達することもある。葉は互生し基部で二本に分枝し、さらに二又に何回か枝分かれする。葉には捕虫囊がつく。夏に茎より太い長さ10~30cmほどの花茎を伸ばし、黄色い蝶型花をつける。秋に長さ4~10mm、幅3~7mmほどの長楕円形の殖芽を側枝に形成し、越冬する。



夏に花茎を伸ばし黄色の蝶型花が咲く



水面を漂うイヌタヌキモ



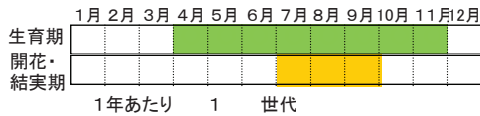
分枝した葉に密につく穂虫囊

名前の由来: 糸状に枝分かれする葉を茎に密につけ、水中にたなびく様子を狸のしっぽに見立てて、狸藻。加えて、自然湖沼に生育する狸藻に似るが、やや小型であることから、犬狸藻。

<農業との関係>

タヌキモ属の仲間では、イヌタヌキモの他にコタヌキモ、ヒメタヌキモが水田で見られるが、いずれも現在は各地で絶滅危惧種に指定されるほど少なくなっている。浮遊植物であり水稲に影響を与えることは少ないと考えられる。ただ、ため池では、繁茂しすぎると取水しにくいことがあるかも知れない。庭池などにあるとボウフラがわきにくく、花も可憐なため、利用されてきた一面もあるだろう。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種>

タヌキモの殖芽は大きく球形となる。ため池に多いノタヌキモは3輪生しイヌタヌキモの葉が平面的な分枝するのに対し、立体的な枝分かれする。やはりため池に産するフサタヌキモの葉はさらに細かく枝分かれし、花の色も淡い黄色となる。

<一言うち>

タヌキモ属の多くは食虫植物として知られ、虫を捕らえる穂虫囊を持っています。普段は扉が閉じられ周辺より水圧が低い穂虫囊にボウフラなどが触れると扉に隙間が生じ、水圧差によって穂虫囊に吸い込まれます。穂虫囊に吸い込まれた虫はゆっくりと消化・吸収されていきます。

<人との関わり合い>

タヌキモの仲間は属名のウトリキュリアの総称で呼ばれ、観賞用の食虫植物として一部のマニアの中で人気が高い。しかし、近年、観賞用に導入された外国産のタヌキモ(エフクレタヌキモ: *Utricularia inflata*、オオバナイトタヌキモ: *U. gibba*)などが各地で逸出し、旺盛な繁殖力でイタタヌキモをはじめとする在来のタヌキモを追いやったり、水辺の生態系への悪影響が懸念されている。一旦、野外に定着すると駆除は難しく、ウトリキュリアに関わらず観賞用植物の管理には充分注意を払うべきである。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

たぬき藻の冬へ入らんと裏筑波 (宮坂静生)
カッパのまぼろしながる小狸藻 (小川芋銭)

分布: 全国

ヒツジグサ (スイレン科)

ニムバエア テトラゴナ
学名: *Nymphaea tetragona*

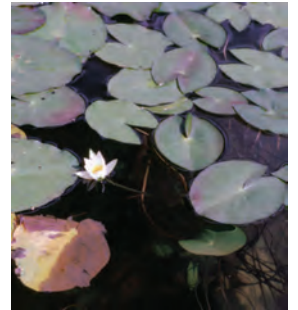
羊草 別名: スイレン、カメバス、コレンゲ、カッパグサ、ハクセン(白鮮)

主な生育場所

ため池や湖沼、湿原の池塘など、恒常的な止水域に生育。腐植由来の有機物が多く溶存する腐植栄養湖や貧~中栄養の池や湖沼に見られ、富栄養な環境で見かけることはない。また古い池に多い。

特徴

多年生の浮葉植物。太く短い塊状の根茎から沈水葉と浮葉を伸ばす。沈水葉は薄く、幅の広い矢尻形~半円形。浮葉は楕円~卵形で、基部は深く切れ込み、裏面は赤紫色を帯びる。花は径3~7cmで、開花は2~3日続き、午前中に開き夕方閉じることを繰り返す。花弁は白色でガクは4枚。葉や花は北日本に行くほど大きくなる。

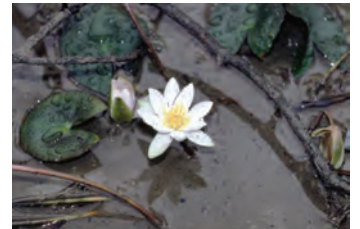
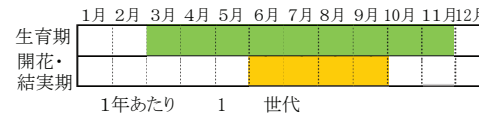


名前の由来: 園芸スイレンが早朝から開花するのに対し、羊の刻(午後2時ごろ)から開花するとされたことから。実際には、お昼前から開花はみられるが、暑い日中の盛りに純白の花は目立つ。

<農業との関係>

水田に生えることはないが、ため池にはかつてよく見られ、ため池を水源とする地域では馴染みの水草。熱帯スイレンや温帯スイレンなど外来種由来の園芸スイレンは地下茎を泥中に伸ばし繁茂するため、ため池では取水障害などを引き起こすが、在来のヒツジグサの根茎は横に拡がらず、また全体に小型のため、ため池で障害となることはほとんどない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種>

観賞用の園芸スイレンは、葉や花がヒツジグサより大きく鋸歯や模様があるものが多い。また、花色が赤や、ピンク、黄色、青色、紫色など白以外のものはすべて園芸種か外来種。花が白色でも、花弁数が多いことでヒツジグサと見分けられる。

<一言うち>

日本の在来種であるヒツジグサですが、近年、各地で減少し、全国26都府県で絶滅危惧種に指定されています。外来種の園芸スイレンが各地で増殖しているのに対し、ヒツジグサは園芸スイレンよりも富栄養化などの水質の悪化に弱く、また埋め立てによる生育地の消失が大きな要因です。



花も葉もヒツジグサよりも大柄な園芸スイレン

<人との関わり合い>

清楚な花を咲かすヒツジグサは、農家の庭先の水盆で観賞用に栽培されることも多かったが、今や各地で減少していることもあり外来種の園芸スイレンにとって代わられてしまった。アフリカやインドでは、種子や根茎を食べている報告があるが、日本では食用の記録はない。また、花には止血・鎮痛作用があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

賜りし刻や光やひつじ草 (岡本まち子) 山の池底なしと聞く未草 (稲畑 汀子)
水面にたどりつきたるヒツジグサ晩夏のひかり集めてひらく (高田流子)
ひつじ草白きひつじのごとき泥炭くさき水にしづまる (生方 たつゑ)

分布：北海道を除く全国

ザクロソウ (ザクロソウ科)

学名: *Mollugo stricta*

石榴草 別名：スズコクサ、モモグサ

主な生育場所

畑や路傍、水田の畦、庭先など、日当たりのよい乾燥した土地によく見られる。攪乱を受けやすく、他の植物が定着しにくい場所を好み、草丈の大きな植物が定着してしまうとの間にか消えてしまう。

特徴

高さ10~25cmほどの小型の1年草。全体無毛で、茎は細く稜があり根元からよく分枝する。葉はやや光沢があり、3~5輪生するが、上部の葉はときに対生。夏から秋にかけて葉腋から細い花柄を伸ばし、花をつける。花弁はないが、径0.5cmほどの黄緑色の5枚の萼が花のように見える。果実は球形で熟すと果皮が裂けて種子がのぞく。

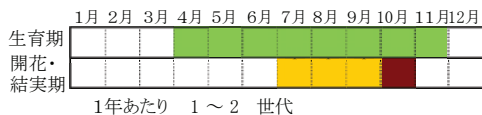


名前の由来：なめらかな楕円形で光沢のある葉がザクロの葉に似ていること、熟した果実が裂けて中の種子が見えることもザクロの実を思わせることから、「石榴草」と名付けられた。

<農業との関係>

関東以西で発生が多く、畑地や果樹園にもよく生えるが、小型植物であるため、強害雑草にはなりにくい。水田では、田植え前にアゼ塗りをを行った畦に多くみられ、アゼ塗りによる攪乱によく適応していることが伺える。近年、畑地や畦などでは、明治期に帰化した近縁種のクルマバザクロソウと混生・競合していることも多い。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種>

熱帯アメリカ原産で外来種のクルマバザクロソウは、輪生する葉はやや丸みを帯びて4~7枚とザクロソウよりも多く、葉腋から伸びる花柄は2~5mmと短く花序は傘状に広がる。

<一言うんちく>

かつては、園芸種マツバギクなどと同じ仲間と考えられていましたが、今ではザクロソウ科として独立しています。混同されやすいのも地味な植物だからかも知れません。日本で見られるザクロソウ科は、今のところ、在来種のザクロソウと外来種クルマバザクロソウの2種しかありません。

<人との関わり合い>

インドネシアでは若い葉を野菜として利用しているという。また中国や東南アジアでは、「粟米草」と呼ばれ、全草を下痢や腹痛の薬として利用している。生薬名は「地麻黄(じまおう)」。

<俳句や短歌への登場>

ざくろそう、石榴草、ともに俳句や短歌などで詠われた事例はみつきりませんでした。注意すればよく足元で見つかる植物なのですが、気付かれなかったのか、それとも題材になりにくかったのでしょうか。炎天下に耐えて、小さいながらも花や実をつける姿からは、いろいろと感情が湧いてきそうなのですが、今後、注目していきたい夏の草花の一つです。

分布：全国

クサネム (マメ科)

学名: *Aeschynomene indica*

草合歓 別名：一

主な生育場所

水田内、水田畦畔、休耕田、水路、河川敷など、湿った場所に生育する。ときに、転作畑など、湿潤な畑地にも生えることがある。ただし、ずっと湛水されている環境に見かけることはない。

特徴

一年草。茎は柔らかく中空で直立し、高さ0.5~1mに達する。葉には托葉があり、複葉は互生し、5~10mmの柄がある。葉の裏面は白味を帯び、光を浴びると左右に開き、暗くなると閉じる。7~10月に葉腋から短柄を伸ばし淡黄色の蝶型花を2、3個総状につける。花後、3~5cmの節果をつけ、熟すと節毎に離れる。種子は暗緑色。

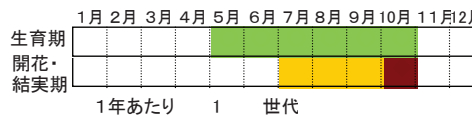


名前の由来：15~30対の小葉からなる羽状複葉が合歓の木(ネムノキ)に似て、木本ではなく草本であるため、草合歓(クサネム)と名付けられた。

<農業との関係>

田んぼに生える唯一のマメ科水田雑草。イネ生育期間中の競合はさほど大きくないが、節果がついた状態で稲とともに収穫されると、脱穀・籾すり後の選別時にクサネム種子がちょうど玄米と同じような大きさのため、玄米に混入して等級を下げってしまうため、農家に嫌がられる雑草の一つ。クサネムの種子が混入する可能性がある場合には、色彩選別機を通す必要がある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種>

西日本に帰化しているアメリカツクサネムは全体大型で花もクサネムの1cmほどの花と比べて2cmほど、節果の先端には尖った角をつけ、長さ20cmと長い。また、黄色の5弁花をつけるカワラケツメイは乾いた場所に生育する。

<一言うんちく>

クサネム属の学名である *Aeschynomene* (アエスキノメネ) とは、ギリシャ語で「恥ずかしがり」という意味です。これは、日が落ちる頃に、葉が閉じて垂れる様子から名付けられました。しかし、水田等にいったん定着すると、なかなか根絶が難しい一面も持っているのです。

<人との関わり合い>

他のマメ科と同様、根粒をつけ窒素固定するので、緑肥として利用されることがある。また、生薬名を合萌といい、利尿、解毒、気管支炎、麻疹に用いる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】
草合歓手折りぬいまま夢抱く (西尾 栄子)
草合歓はすでにねむれり夕ぐれの岡のへ来れば空のあかるさ (土田 耕平)
全身で郷愁をゆるす 草合歓のとちるまで (前原 東作)



ザクロの葉に似た輪生葉



黄緑色の地味な花(萼片)と熟して裂開した果実(右上)



淡黄色の蝶型花



扁平な線形で無毛の節果 熟すと黒くなり節毎に離れやすい。

分布: 全国

ムラサキツメクサ (マメ科)

トリフォリウム プラテンセ
学名: *Trifolium pratense*

紫詰め草 別名: アカツメクサ, 紅ウマゴヤシ, レッドクローバー

主な生育場所

牧草として渡来し、全国の畑や樹園地、畦畔、路傍、法面、草地、河川敷、公園内などにみられる。日当たりの良い環境を好み、やや湿った場所でも生育するが、乾ききった場所には見られない。

特徴

ヨーロッパ原産で明治時代以降に導入された多年草。直立して高さ20~60cmとなり、全体に軟毛がある。小葉は先のとがった卵形で3枚で、V字型の白い斑紋がある。6月頃から秋にかけて茎先に紅紫色の多数の蝶型花からなる径1.5cmほどの球状花をつける。花序の直下には一対の葉がつく。種子は扁平な倒卵形で長さ約2mm。



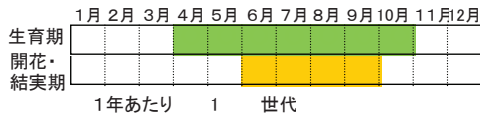
50-100個の小花が集まった花序と葉に出るV字形の白い斑紋

名前の由来: シロツメクサと同様に球形の花序を梱包材として利用してきたので詰め草。赤みがかった紫色の花色なので、紫詰め草または赤詰め草と呼ばれる。

<農業との関係>

トルコ・ヨーロッパ南東部が原産で、昔からムラサキツメクサの生える土壌は肥沃であることが知られ、16世紀以降にはヨーロッパ中で緑肥や牧草として栽培されるようになり、輪栽式農業(地力維持のためにコムギなどの冬作物、マメ類などの夏作物、緑肥や牧草の栽培、をローテーション)などの確立に貢献した。日本には明治以降に寒地型牧草として北海道を中心に導入された。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> シロツメクサは全体無毛で茎は地表を這って立ち上がり、花は白色。タチオランダゲンゲの茎は立ち上がり、淡紅色の花をつけるが、全体無毛で花序の直下には葉はつかない。ペニバナツメクサの花序は長さ2cmほどの円柱形となる。

<一言うちく>

ヨーロッパでは、ムラサキツメクサやシロツメクサなど根粒菌と共生し地力を回復・維持させるクローバー類の牧草によって農業が支えられてきました。そのため、クローバー類は広く親しまれ、デンマークではムラサキツメクサが国花となるほど、慕われる花となっています。

<人との関わり合い>

シロツメクサと同様に、若葉を葉柄が柔らかくなるまで塩茹でし、冷水に手早く晒してゴマかえ、酢の物などにするか、花や蕾は柔らかい葉と一緒に掻き揚げにして食べられるが、味はシロツメクサより劣る。また、フラボノイド類を含み、蕾や若い花を摘んで乾燥させたものを服用すると便宜や咳、痰に効果があるとされる。ヨーロッパではかつて、患部に塗布し、皮膚病や乳がん治療にも利用されていたようである。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 晩春】

赤詰草白詰草に勝る丘 (高澤良一)
詰草の紅きを詰めて南蛮船 (高島征夫)

分布: 全国

メヒシバ (イネ科)

ディギタリア キリアリス
学名: *Digitaria ciliaris*

雌日芝 別名: メシバ, 地縛(じしばり), ひじわ, 相撲取草(すもうとりぐさ), ほとくい

主な生育場所

畑地や田畑の畦、荒地、路傍、庭先、樹園地など、里地内の日当たりが良い場所なら至るところに見られる。乾いた場所だけでなく水辺でも生育するが、湛水が続くような環境には見られない。

特徴

一年生植物。幼植物のうちから、地表を這うか斜上し、節から根を下ろして枝分かれし四方に広がる。幼苗時には葉の両面に毛が生えるが、成葉には裏面や下部にまばらに毛が残る。また葉鞘には長い開出毛がでる。節に夏から秋にかけて立ち上がった茎の先に5~15cmの細い穂を放射状に伸ばし約3mmの小穂を二列につける。

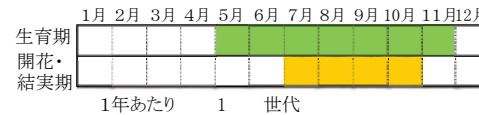


名前の由来: 日なたを好む地を這って伸びるシバ(芝)のなかで、やや葉も茎も太く固い強壮な雌日芝(オヒシバ)に対し、葉も茎も柔らかく優しげな感じがするため、雌日芝(メヒシバ)とされた。

<農業との関係>

生育速度も速く、地面を這って群落をつくり根を下ろした節からも簡単に再生し、種子生産量も多いことから、畑地や樹園地での代表的な強害雑草となっている。繁茂すると、落花生のような草丈の低い作物では収穫量が皆無となることもある。しかし、種子の寿命は2~3年と短いため、数年間、種子を落とさないようにきちんと管理すれば、発生量を著しく減少させることは可能である。

<生活史> 関東地方の例(目安)



荒地地に繁茂するメヒシバ群落

<類似種> メヒシバと混生することも多いアキメヒシバは、メヒシバほど地上を這わずに立ち上がり、葉鞘には毛がなく、小穂は2mmと小さく丸みを帯びる。メヒシバより小型のコメヒシバは、やや日陰を好み、葉鞘は無毛で、穂は2~3本しか伸ばさない。

<一言うちく>

メヒシバは日本全土に見られますが、熱帯から温帯にかけての全世界でも生育するワールドワイドな草種の一つです。生育環境も山地草原から湿地帯まで広いのですが、畑地や放牧地、路傍など、人の影響が強い場所に多く見られ、世界各地で馴染みのある草と言えるでしょう。



メヒシバ(左)とアキメヒシバ(右)の小穂(メヒシバの方が長く細い)

<人との関わり合い>

人里環境に多い草なので、雑草として厄介者扱いされるだけでなく、メヒシバの仲間には雑穀として作物化されるものもある。また、飼料としての嗜好性も高く、かつては牛馬の餌として利用されてきたようだ。ただし、一年生草種なので利用できる時期は限られてしまうことが難点である。畑地では繁茂すると強害雑草となってしまうが、その旺盛な繁殖力は作物だけでなく他の雑草の生育も抑制するため、有機農業や自然農法の畑地では作物栽培時期をずらして、リビングマルチとして利用されることもある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】

月光に招かれるのはメヒシバです 小枝恵美子
朝霧にぬれたわみたる夏草のめひじはの穂のほのかこそよぐ 三ヶ島霞子

分布: 全国

ヒメジソ (シソ科)

モスラ ディアンテラ
学名: *Mosla dianthera*

姫紫蘇 別名:

主な生育場所

水田や畑の畦畔, 休耕田, 樹園, 道ばた, 野原, 湿地, 林縁, 水辺などに生える。やや湿った場所を好むが, 絶えず冠水する場所には少なく, どちらかというと水際や陸域草地との境目附近に多く見られる。

特徴

高さ20~60cmほどになる一年草。茎は方形で直立し, 稜には下向きの短毛が生え, 節にも白毛がある。葉は対生し, 長さ2~4cm, 幅1~3cmほどの菱状卵形~広卵形。葉縁には4~6対の粗い鋸歯がある。9~10月頃, 葉腋と枝先かに長さ3~7cmほどの花穂を伸ばし, 白または淡紅色の4mmほどの唇形花をやまばらにつける。



名前の由来: 栽培種のシソに似ているが, 全体に小型でシソ科特有の香りも少ないため, 控えめなシソということで姫紫蘇と呼ばれる。

<農業との関係>

水田畦畔にはよく見られるが, 水田内に生えることは少なく, 生えても中干し以降の後期発生となるため, 害草とはならない。湿り気が多い畑や果樹園にもよく生えるが, 草丈も低く, 刈り取りにも弱いので, 害草化することは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 良く似たイヌコウジュは, ヒメジソよりやや乾いた場所に生え, 全体に毛が多く, 葉の鋸歯が6~12対と多くて細かい。また, ヒメジソの花の萼片の先はあまり尖らないのに対し, イヌコウジュの萼片の先は鋭く尖る。

<一言うんちく>

シソ科の植物の中でもヒメジソは, 葉をちぎって嗅いでみてもあまり芳香を感じることが少ない種類ですが, 時にシソ科特有の良い香りを持つものに出会うことがあります。皆さんも散歩の途中等でヒメジソを見かけたら, 葉をちぎって匂いを嗅いでみたらいかがでしょうか。

<人との関わり合い>

晩秋にかけての蒔田の周辺によく見られ, 小ぶりながら楚々とした花をつけるので, 秋の野辺を彩る花の一つとして捉えられてきたかとも思うが, あまり記載が少ない植物である。シソ科であるため, 香菜として使われそうだがあまり芳香が強くないことから, 食用等に利用されたとの記録もない。ただ, 海外では中国で虫下しに利用されたとの報告がある。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】

芦つむとかがめる膝に匂ひ立つ枯草は親し姫紫蘇の類 (土屋文明)

分布: 全国

ヤエムグラ (アカネ科)

ガリウム スプリウム エキノスペルモン
学名: *Galium spurium* var. *echinospermon*

八重葎 別名: 黠草草, クンショウバナ, トリグサ, スネカキ, イゲハコベ, クチキリ

主な生育場所

畑や果樹園, 田畑の畦, 荒地, 藪, 野原, 路傍, 庭先など, 人里に近い環境下でごく普通にみられる。被陰にも生える。堆肥置き場など栄養分のある場所を好み, 水田裏作雑草にもなっている。

特徴

つる性の1年生, または越冬する2年生。茎の断面は四角形で枝分かれが多い。茎の長さ50~100cmほどになる。茎の稜には下向きのトゲがある。葉は6~8枚が輪生し, うち2枚が葉で4~6枚は托葉が変化したもの。5~7月に茎先や葉腋に濃黄緑色の径2~3mmの4裂した花をつける。果実は径2~2.5mmで2個ずつつける。

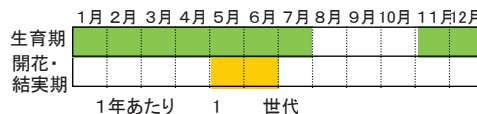


名前の由来: 節毎に数枚ごとに葉が輪生しているところから八重(ヤエ)。古語で草むらのように生い茂った状態をムグラと呼んでいたことから, ヤエムグラ。

<農業との関係>

春の代表的な雑草で, 特に麦畑などで秋に発生して越冬し, 春先の気温の上昇とともに, 作物にからみつくように生育・繁茂するため, 強害雑草となる。しかし, 夏の暑さには弱く, 盛夏には枯れてしまうため, 雑草害を生じるのは, 麦, キャベツなどの越冬生作物に限られる。また, 畦畔などに繁茂すると, トゲで絡み合った群落となるため, 刈り払いが大変となることもある。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 人里近い明るい草地に生えるヨツバムグラやヤマムグラ, ヒメヨツバムグラは4輪生で茎にトゲがない。クルマバソウは6~10枚の輪生葉となるが, 茎は無毛で花は白色で長さ5mmと大きく, 林内に生える。

<一言うんちく>

ヤエムグラの葉の縁や裏側の中肋には小さいトゲ状の毛があり, 輪生葉の部分を持ち上げると, ちょうど黠草のように服にくっつきやすいので, かつての子供たちは, ヤエムグラの輪生葉をたくさん胸につけて, 黠草ごっこを楽しんだものですが, 最近ではそのような遊び方も見なくなりました。



葉腋に付ける黄みがかった4裂の花



カギ状のトゲが生えた, 2個ずつ並ぶ果実

<人との関わり合い>

「むぐら」とは, 雑草が密生して繁茂する状態を表し, 人手が遠ざかった風情を表す表現としてもよく使われてきた。2012年7月号のカナムグラの項で紹介したように, 百人一首で恵慶法師が詠った「八重葎(やへむぐら) しげれる宿の さびしきに 人こそ見えぬ 秋は来にけり」もツル草が生い茂った家屋の哀愁を詠っているが, この八重葎とは, 本項で紹介したヤエムグラではなく, カナムグラのこととされている。ヤエムグラは夏には枯れてしまうので, 秋まで茂ることはない。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

むぐらさへ若葉はやさし破れ家 (松尾 芭蕉) 夕顔のあとからのぼるむぐらかな (野沢 凡兆) 八重葎露ぞこぞりたる彼岸かな (石田 波郷) 八重葎潰えて咲ける茶の木かな (水原 秋桜子) 屋顔や種も蒔かれぬ八重葎 (尾崎 紅葉) がちやがちやや壺より黒き八重葎 (川端 茅舎)

分布: 全国

ヘビイチゴ (バラ科)

ポテンティラ ヘビイチゴ
学名: *Potentilla hebiichigo*

蛇莓 別名: ドクイチゴ, ウマイチゴ, キツネイチゴ, クチナワイチゴ

主な生育場所

水田や畑の畦, 樹園, 休耕田, 野原, 道ばた, 土手, ときに田畑にも見られる。やや湿り気のある日当たりのよい場所を好むが, 陰地にも見られることがある。長く冠水するような環境には生育しない。

特徴

地面を這うほふく茎を出す多年草。全体に長軟毛がある。葉は長さ幅とも2cm内外の3小葉からなり, 根出葉には長い葉柄がある。小葉の縁には粗い鋸歯がある。葉腋から花柄を伸ばし, 径1.5cmほどの黄色の五弁花をつける。萼は花弁よりも大きく先が3裂する。花後に花床が膨らみ熟すと赤色で球形のイチゴ状の果実となる。



萼片は花弁よりも大きく, 花の隙間からよく目立

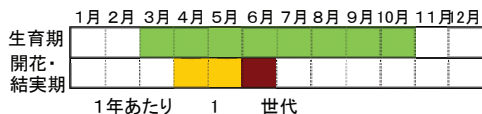


名前の由来: 赤く熟した果実は人間の食用とならないがヘビが食べるとして, ヘビイチゴ。ただし実際にヘビが食べることはない。

<農業との関係>

田畑周辺の畦や農道草地に多いが, 畑に入り, 群落を形成し害草となる場合もある。耕起には弱いため, 問題となりやすいのは不耕起や未耕起部分に限られる。ほふく性のため, 刈りとりには強く, また日当たりを好むため, 田の畦畔などではヘビイチゴ群落が増えることと適切に草刈り管理が行われていることの指標となる。除草剤には弱く, 除草剤を散布している畦畔にはほとんど見られない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> ヘビイチゴと同様な環境に生え, 混生もするオヘビイチゴは5小葉からなり, 花はやや小さく萼片は花より短く目立たない。また果実もイチゴ状に赤く膨れない。ヤブヘビイチゴは林縁に多く, 全体に大型で小葉の先は丸みを帯びず尖る。

<一言うんちく>

蛇莓は, 毒莓とも呼ばれ, 名前を聞くと恐ろしいですが, 果実も含め植物体は無毒で, トゲもなく無害です。ただし, 食用となる他の野イチゴと異なり, 果実には香りも甘みもなく全く美味しくありません。群生すると黄色の花は見事なので, 別の呼び名を考えてあげたい草花の一つです。

<人との関わり合い>

田畑の畦などに普通にあり, 恐ろしい名前に似合わず黄色の派手目の花をつけるので, 昔からよく知られ, ママゴトの材料に使われたり, 俳句や短歌などにもよく登場する。また, 果実は生食には適さないが, 色は鮮やかに出るので, ジャムやリキュールの色づけに利用できる。花の時期に採集し, 天日乾燥した植物体は, 生薬「蛇莓(じゃも)」と呼ばれ, 解熱や神経痛などに効果がある。また, 果実を焼酎に漬け込んだものは, 虫さされやかゆみ止めになる。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】 田水満ち日出づる露に蛇莓 (飯田蛇笏) 春ふかい草をふみわけ蛇いちご (種田山頭火)
蛇いちご半月提て夫婦づれ (服部嵐雪) 川ばたのアカシアの森のした草は刈りあらされて蛇莓見ゆ (若山牧水)
血のいろのあな毒々し, 蛇覆盆子, 古沼(ふるね)の岸のうすくらがりに (岡 澄里)
まだそれが恋と呼ばれる感情と知らないふたりの摘むヘビイチゴ (天野 慶)

分布: 関東~東北地方

カントウヨメナ (キク科)

アスター ヨメナ デンタトゥス
学名: *Aster yomena* ver. *dentatus*

関東嫁菜 別名:

主な生育場所

路傍, 田畑の畦畔, 畑地, 樹園地, 林縁, 野原, 河川敷, 法面草地, 水辺沿いなど幅広い環境に見られ, やや湿った場所に群生する。里地とくに耕地周辺によく見られ山野で見かけることは少ない。

特徴

横に伸びた地下茎で繁殖する多年生。4月頃より地下茎から新芽を伸ばし, 茎は直立するが, 上方ではやや狭い角度で分枝する。高さは40~100cmほど。ほとんど毛のない葉は互生し, 粗く揃った鋸歯があるが, 上部の葉は全縁となる。8~11月頃枝先に径3cmほどの薄紫あるいは白色の舌状花をつける。種子の冠毛は0.25mmと短い。



名前の由来: 山に生え, ヨメナと同様に若菜を食用とするシラヤマギク(婿菜: ムコナ)に対して人里に生え女性にも摘みやすいから嫁菜との説や, ネズミの異名「ヨメ」が食べる野菜との説などがある。

<農業との関係>

花は綺麗であるが, 地下茎を横に伸ばし群生化するため, 雑草性が強く, 樹園地などで強害雑草となることがある。刈り取りには強いが, 耕起や中耕には弱い。畦等から畑に侵入しても問題となることは少ない。また, 水辺を好むが水中では生育しないので, 水田内に定着することも少ない。畦畔によく生え, 刈り取りに強く根を張るため, うまく管理すればカバープランツとして利用できる。



青みがかったカントウヨメナの花

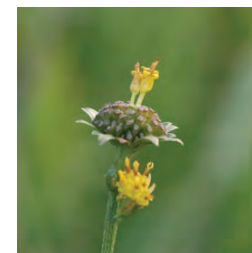
<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 中部地方以西にはカントウヨメナよりやや大型のヨメナ, 四国・九州には小型のコヨメナが分布する。カントウヨメナと同所的には葉の質がやや薄く, 鋸歯が不規則なユウガギク, 花色の青みが強く, 種子の冠毛が長いノコンギクなどが見られる。

<一言うんちく>

伊藤左千夫の名作「野菊の墓」で主人公が悪心を抱いた従姉の墓の周りに植えた野菊とは, 舞台が千葉県であることから, カントウヨメナか類似種のユウガギク, ノコンギクあたりと推察されます。いずれの花も園芸種の菊と異なり, 楚々とした花の風情が非恋を物語る趣によく似合います。



種子の冠毛は非常に短く肉眼では確認しづらい

<人との関わり合い>

春の七草のうちの「すずな」とはヨメナとの説もあるほど, 万葉の時代からヨメナの仲間の若菜は「おはぎ」または「うはぎ」と呼ばれ食用野菜として利用されてきた。カントウヨメナはあまり利用されていないようだが, 若芽や新芽を生のままサラダにしたり, 炊きたてのご飯に塩茹でしたヨメナを混ぜ込みヨメナご飯とする。また, 揚げ物, ゴマ和え, 水気をとって油炒め, 卵とじなどにする。花とつぼみも天ぷらにできる。また, 乾燥したヨメナを解熱や利尿剤としても利用できるという。

<俳句や短歌への登場>

【春, 嫁菜の花: 秋】
妻もあらば 摘みて食(た)げまし 沙弥(さみ)の山 野の上のうはぎ 過ぎにけあらずや (万葉集) ※うはぎ: ヨメナ
朝冷えは来ていたるなり初花のヨメナのひとつつつかしく咲く (鳥海昭子)
炊き上げてうすき緑や嫁菜飯 (杉田久女) 蘆垣に嫁菜花さく洲崎かな (泉鏡花)

分布：東南北部以南

ツワブキ (キク科)

学名: *Farfugium japonicum*

別名: ツワ、イソブキ、タクゴ、ヤマブキ、タカラコウ、イシブキ

主な生育場所

元来、海辺に近い岩場などに自生していたが、観賞用に庭などに植えられることが多い。また、里山の林床などにも見られる。長時間の直射日光に弱く、直接日が当たることのない明るい日陰を好む。

名前の由来: フキに似て光沢(ツヤ)のある葉をつけることからツヤ蕨が訛ったとの説や、厚葉蕨(あつばふき)から転じたとの説などがある。

特徴

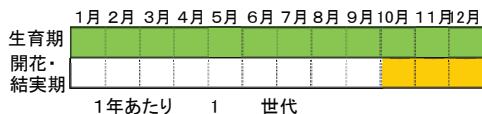
常緑の多年草で真冬でも枯れることがない。長い葉柄をもった円形に近い葉は強い光沢を持ち、厚みがある。地下には太く短い根茎をつくる。10-12月ごろ、葉の間から花茎を30~50cmほど伸ばし、その先に径5cmほどの黄色の頭花を数個つける。花は数枚の舌状花と多数の筒状花からなる。種子は綿毛で風によって散布される。



<農業との関係>

耕耘や刈り取りに弱いため、農地で見られることはほとんどないが、暖かい地方では果樹園や茶畑、山林を開墾直後の畑などで時に雑草化することがあるようだ。しかし、農地周辺に見られる場合の多くは、観賞用に人為的に植栽したか、故意に残しているものと思われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> フキの葉には光沢がなく、また秋には葉が枯れてしまう。ゼニアオイなど丸みを帯びた葉をつけるアオイ科の仲間と似ることがあるが、濃緑色のツワブキの葉に比べ、アオイ科の葉は緑色が薄く、葉の厚みも少ない。

<一言うちく>

海岸の岩場で、冬の厳しい潮風に堪え忍んで毎年きれいな花を咲かす姿から、ツワブキの花言葉は「困難に負けない」「愛よ慰れ」。庭先でも多くの花が姿を消す秋から冬にかけて花を咲かせ、真冬の寒さにも負けず葉を落ささないツワブキに励まされる方も多いのではないだろうか。



舌状花と筒状花からなるキクに似た花をつける



光沢を持ち厚みのある葉は冬でも枯れない

<人との関わり合い>

ツワブキは花の美しさだけでなくツヤのある葉も通年楽しめることから、江戸時代から観賞用に栽培されてきた。品種としても葉に星状の黄色い斑が入る星斑や葉縁が白くなるもの、縮れるものなど多くの品種がある。また、春先の葉柄を塩茹でし皮を剥いて細かく刻み、煮付け、和え物、揚げ物、佃煮などで食べられる。花と蕾も天ぷらにできる。また、葉には抗菌作用の強いヘキサセナルが含まれ、火であぶって腫れ物、切り傷、湿疹などの貼り薬として利用できる。根茎も胃腸薬として利用できる。

<俳句や短歌への登場>

【季語:冬】 咲くもおもはであるを石蕨の花 (与謝蕪村) ちまちまとした海もちめ石蕨の花 (小林一茶)
蝶ひとつとばぬ日かげや石蕨の花 (宝井其角) 静かなる月日の庭や石蕨の花 (高浜虚子)
石蕨に隣りて生ふる山羊歯の黄に伏す時にわれは見にけり (斎藤茂吉) 空家やつくばい氷る石蕨の花 (夏目漱石)
石蕨に黄の花の立つところとなりにはかに近く照る対う岸 (竹山 広) 枯木かこんで津波蕨の花 (種田山頭火)

分布：沖縄を除く全国

ニリンソウ (キンポウゲ科)

学名: *Anemone flaccida*

別名: 福平(フクペラ)、カショウソウ、子持菜(コモチナ)、セキナ

主な生育場所

落葉樹主体の雑木林や野山の林床、林縁、溪流沿いなどによく見られる。半日陰の湿気のある場所を好んで群生する。山地にも生えるが、人里近くの山麓や里山、山道沿いにも見ることができる。

名前の由来: 茎先に花茎を2本伸ばし、2輪の花を咲かすことから、二輪草。また、深い切れ込みのある葉が鷲鳥の足形に見えることから、鷲掌草(がしょうそう)。

特徴

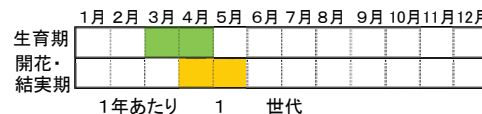
多年草。冬期に地上部は枯れるが地下茎で越冬する。春先2~3月に萌芽し、落葉樹が葉を展開する前に短期間に葉を拡げ、3月から6月にかけて花を咲かせ種子をつける。他の植物の生育が盛んとなる初夏には枯れて休眠状態に入る。白い花被片5枚の直径2cmの二輪の花を茎先につけ、2輪目は最初の花に遅れて咲く。



<農業との関係>

畑地に生育することはないが、粗放的管理を行っている果樹園で見られることがある。しかし、早春から春にかけての短い時間のみ生育し、他の時期には休眠状態となることから、農業上の被害は生じない。また、園芸種のアネモネの仲間では花は観賞価値も高いため、農地周辺に見られる場合には駆除の対象とはなりにくかったと思われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> イチリンソウの花は直径4cmと大きく、茎先に一輪のみ花をつける。茎先に3~4輪の花をつけるサンリンソウの花は直径1.5cmほどと小さく花期も遅れる。キクザキイチゲやアズマイチゲの花被片は8~13枚と多い。

<一言うちく>

ニリンソウやカタクリに代表されるように、春先の落葉樹の林床で他の植物が葉を展開する前の短期間に、生育・開花し夏までに地上部を枯らしあとは地中で過ごす草花たちのことを、そのはかない花の可憐さからスプリング・エフェメラル Spring Ephemeral (春の妖精)と呼んでいます。



白い花びらのように見えるのは、がく(花被片)



イチリンソウの花は4cmと大きい

<人との関わり合い>

早春の林床にいち早く咲き乱れる群落は各地で親しまれ、まず一輪が咲きやや遅れて寄り添うように二輪が咲く様子は、夫婦の姿にも喩えられ、歌謡曲(「二輪草」唄:川中美幸)にも取り上げられている。毒草が多いキンポウゲの仲間では珍しく若菜は食用となり、特に北海道では山菜「ふくべら」として利用される。しかし、若菜は猛毒のヤマトリカブトに類似しており注意が必要。また、乾燥させた根茎は生薬「地烏(じう)」として、リュウマチや神経痛に効果がある。

<俳句や短歌への登場>

【季語:春】 春なれや二輪草の花の群れ(一水) 二輪草の一輪すこしおくれけり(岡林英子)
森の奥に日ざしうつらふ二輪草(奥田とみ子)
清純に二輪草白く咲きそろう谷間傾りを風わたりゆく(鳥海昭子)